

## 鉄道員の息子

降旗康男監督による「鉄道員」が1999年に上演され、大きな感動を呼んだ。原作は直木賞を受賞した浅田次郎『鉄道員』であり、高倉健・大竹しのぶ・広未涼子・小林稔侍らによって演じられた。高倉健が演ずる駅長が、妻や娘が亡くなった時にも、列車を送り出すシーンがじつに印象的で鮮明に記憶している。北海道の過疎化が進む赤字ローカル線は廃止の運命にあり、「信号よし、出発進行」と列車を送り出した駅長の姿もやがて消え去ることになる。

わたしも鉄道員の息子である。10数年前に亡くなった親父は日本国有鉄道＝国鉄マンであった。名古屋機関区などを経て、高山線などの駅長を勤めて退職した。幼い時から鉄道「官舎」暮らしをつづけ、鉄道に憧れを抱いて育ってきた。思い出に残るのは、やはり幼少の頃を過ごした千種駅（現在の駅より鶴舞より）に近いところの鉄道「官舎」である。今の共同アパートのようなところで、近所付き合いも多くあり、子供たちも仲が良かった。いろいろ回想されるが、伊勢湾台風の時に窓が飛ばされないように、母と兄とで必死に雨戸を押さえていたことが、いまだに記憶から離れない。

いちばん記憶に残っている親父の姿は、現在は第三セクターの「長良川鉄道」となった越美南線の深戸駅長の頃だ。高山から転勤して初めて駅長となった時であり、わたしも高山の斐太高校から郡上高校に転向して一緒に生活をした。健さんほどではないが、親父の駅長姿もなかなか格好が良かった。駅のすぐ横に「官舎」があり、まさに職住一体の生活であった。朝など列車が到着してから家を飛び出し、親父に叱られたこともあった。深戸駅から郡上八幡駅までは2駅であるが、なにせ列車の本数が少なく、1本乗り過ぎすと大変であった。

中学から高校にかけて、わたしも鉄道員になってみたいと考えたことがある。親父の影響もあるが、とにかく列車が好きであり、列車を運転したり駅で働きたかった。親父も鉄道員の息子を期待していたようだ。だが、視力の関係などから諦め、斐太高校から郡上高校、そして信州大学へと進み、現在に至っている。もし、あの時に「国鉄マン」になっていたら、どうなっていたであろう。わたしの性格を考えると、国鉄分割民営化などの嵐のなかで苦しい「対応」をしていたのではないか。「鉄道員」を見ていて、親父の姿や「官舎」暮らしが思い出された。

(2月13日記)